



## 時短育休中の愛知・西尾市長「定時帰宅でもいい。自分なりの働き方を」

毎日新聞 2019年12月20日 19時03分 (最終更新 12月20日 19時05分)

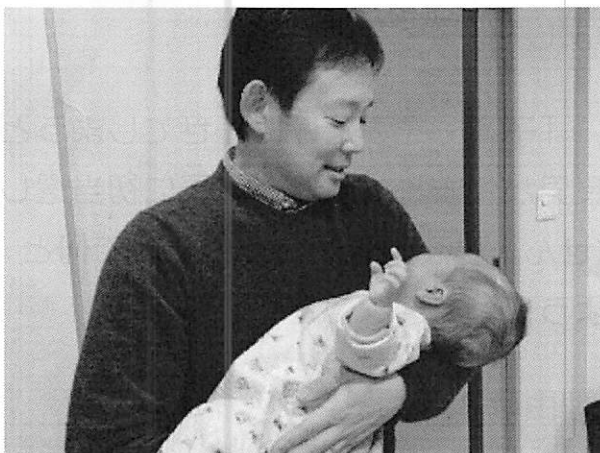


「育休」を取り、長男と夕飯を食べる中村健市長 = 本人提供

小泉進次郎環境相が来年1月に予定される第1子の誕生後の育児休業を検討しているというニュースが話題になった。しかし、国内では男性の育休取得が進まない。取得率は6・16%（2018年度）にとどまっている。政府は20年に13%という目標を掲げるが、達成は難しそうだ。そんな中、愛知県西尾市の中村健市長（40）が11、12月、夕方以降の公務を控えて育児に専念する「育休中」。年の瀬、政治家として呼ばれることの多い忘年会などをキャンセルしている。どんな思いで決断したのか、聞いた。【聞き手・細川貴代、太田敦子】

「育休」を取り、長男と夕飯を食べる中村健市長 = 本人提供

### 「楽しい」と「大変」が半々



夕方以降の育休の時間。中村健市長は0歳の次男をあやす = 本人提供

——育休1カ月半が過ぎました。様子を教えてください。

◆遅くとも午後6時過ぎには帰宅し、6時半までに夕食。その後子どもと少し遊び、上の子とお風呂に入ります。午後8時半には寝室に行って寝かしつけますが、一緒に寝てしまっていることが多いです。帰宅後は仕事はせず、どうしても必要な時は朝早く登庁してやるか、子どもを寝かせた後にやっています。

「楽しい」と思うのが50%、「大変だな」が50%です。楽しいのは子どもの小さな成長を直接実感できるところ。一緒にいる時間が多いので、以前よりも長男



育休についてのインタビューに応じた中村健市長。もうすぐ午後6時の退庁時間だ＝愛知県西尾市役所で2019年12月10日午後5時、太田敦子撮影

がなついてくれるのがうれしい。大変なのは、子どもの時間に合わせるので、自分の時間が作れないということです。

——ご家族の反応は？

◆妻は何点をつけてくれるかは分かりませんが、100点かといえば違うと思います。それでも、第1子の時と比べ、5～10倍くらい関わっていると思います。食事は作っていませんが、自分なりにできることはやっています。妻には「洗濯物を取り込

んで畳んだり食器を洗ったり、直接的な育児だけでなく、そういうところも含めてやってほしい」とは時々言われます。ということは、僕がそこまでできていないんですが。

——市長はなぜ育休を取ろうと思ったのでしょうか。

◆日本で男性の育休が進まない中、西尾市でも進んでいないという問題意識を市議の時から持っていました。首長は60代、70代の人が多い。子育て世代の自分が市長になった時には、ひとつの問題提起の形として育休を取りたいと考えていました。過去に2度育休を取った三重県の鈴木英敬知事にも話を聞き、首長の育休取得はメッセージとしても意義があると思いました。

もう一つの大きな理由は、2人目が生まれ、「子育てを妻だけに任せてしまうと家庭が回らない」と思ったからです。2歳の長男が生まれた時は、市長に初当選した時期と重なり、ほぼ子育てに関われていません。妻が頑張ってくれたので何とかりましたが、2人目が生まれた時は同じようにはできないと思いました。

——「育休」を、夕方以降に取る形にした理由は？

◆妻は公務員で、現在育休中です。育児に貢献できる形を考えて、妻に「どの時間に僕がいると良い？ どの時間が子育てや家事が大変？」と尋ねました。妻は「夕方以降、子どもを寝かしつけるまでの3時間が大変」と。一方で「日中は居てくれなくていい」とも。それなら、昼は仕事をして、夜に育児をすれば、一番良いバランスがとれると考えました。

——年末は行事が多い。スケジュール調整は大変だったのでは？

◆例年、年末年始はほぼ毎日、夕方以降はどこかに呼ばれることが多かった。それを断る心配はなかったです。実際にお断りしているのは秘書ですけども。昨年までお声掛けいただいた団体が実際どう思っているかは分かりませんが、市民から反対の意見は聞きません。どうしてもという用件は副市長が出てくれているので、副市長の負担が増えているのは間違いないと思います。

——この育休で誰にどんなメッセージを伝えたいのでしょうか。

◆西尾市の男性職員の育休取得率を見ると「取りたい」と思っている人が取れていないと感じています。必ずしも「育休」でなくても、定時で帰宅するような働き方でも育児に貢献できます。男性職員の育休取得率の向上につなげたいというのが直接的なメッセージですが、本質的には各職員が一番良いと思う育児や働き方ができるように実践してほしいということです。

——小泉環境相の育休取得の動向が注目されています。3日の記者会見では「自分が取ればいいというものではないし、環境省職員の働きやすい環境をつくる。自分のことだけ考えちゃだめだ」と発言し、育休を取らない可能性も報じられています。どう受け止めますか。

◆そうなんだ、というくらいですね。他人の取り組みを評価するつもりはありません。ただ、育休を問題提起した以上は、取っても取らなくても賛否両論あると思います。小泉さんは正確に「断念」とは言っていないと思いますが、今言っていることをやるのが自分で一番納得できるならそれで良いのではないかと思います。でも、本音ではなく、そう言わざるを得なかったというのであれば、少し残念だと思います。僕は一番後悔しない選択をしたいと思い、今回こういう取り方をしました。

## 「中村家」と「市長」のバランス考えたい

——育休後は公務と育児にどう関わりますか。

◆年明けからは試行錯誤し、「中村家」と「西尾市長」の部分で一番良いバランスを考えていく時期だと思っています。週1、2回、夕方以降に仕事をしない日を作るなど、仕事の状況をみながら一番良いところを見つけていきたいと思っています。

得るものの大きい2カ月間で、実際に育児をしないと分からないことがありました。この経験は市民サービスや行政の長としても生かせるところが多いと感じま

す。

今後は市の管理職に、部下の仕事と家庭との調和を支援するための研修を受けてもらい「イクボス宣言」をしてもらおうと考えています。それぞれがワーク・ライフ・バランスを考え実現できる職場や社会にしたいと思います。

## なかむら・けん

1979年生まれ。西尾市職員から同市議を経て、2017年6月の市長選で初当選。同年4月に長男、今年9月に次男が誕生。その月の記者会見で、育児のために夕方以降の公務を控える「育休」を2カ月間取得すると宣言した。

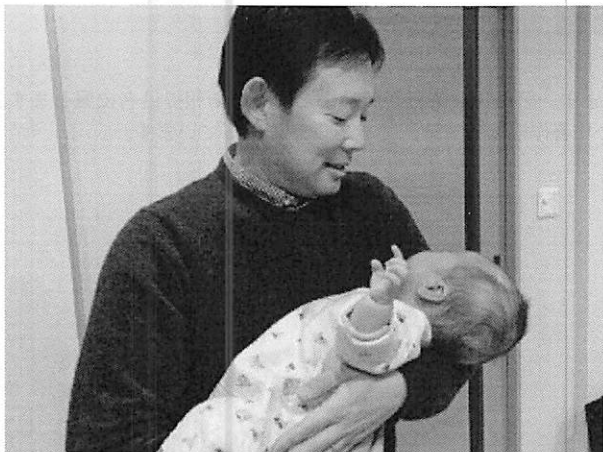
---

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.

## 育休市長に「波及効果に期待」「踏み込んだ対応必要」 愛知・西尾

毎日新聞 2019年12月20日 19時06分 (最終更新 12月20日 19時06分)



夕方以降の育休の時間。中村健市長は0歳の次男をあやす＝本人提供

自治体の首長ら特別職は、勤務時間や育児休業に関する法律の定めがない。このため中村健市長は夕方以降の公務を控えることで、自主的な「育休」としている。

「育休」を取る首長が増え始めた。2010年、成沢広修・東京都文京区長が首長として初めて約2週間の育休を取得。12年と16年には鈴木英敬・三重県知事が時間休などを組み合わせて数日間取得。18年には森智広・三重県四日市市長が平日5日間の育休を取るなどの例があった。

中村市長には、市民から夕方以降の懇談会や会合への出席依頼があるという。調整する秘書課の担当者は「事情を伝え、お断りしているが、調整は大変。『うちだけでも来てよ』という方もいますが例外を作るわけにはいかないの」。

反応はどうか。西尾市職員組合委員長の犬塚隆之さんは「育休を悪いと思っている人はいないとは思いますが、市長の育休で男性職員が育休を取りやすくなった実感はない」と言う。同市の今年までの男性職員の育休取得者は6人で期間は最長約3カ月。犬塚さんは「女性職員でも育休制度や時短勤務、時間休を取りづらいと聞く。職場全体で取れると思えるようになるべきだが、人員に余裕がない中では遠い話。男性職員に育休を取らせるには、もう一步踏み込んだアクションが必要では」とした。

男性の育休取得率が高いノルウェーは、育休の一部を父親に割り当てる制度がある。視察経験がある鈴木規子市議（66）は「男性の育休は社会を変えるために必要なもの。市長の育休は結構なことで、その先の市全体への良い波及効果を期待したい」と前向きだ。

市民にも好評のようだ。親子で市役所を訪れていた幼稚園教諭の女性（33）は「賛成。夫は子供が生まれた時に育休を1週間取った。精神面でとても楽だった。夕方から寝かしつけまでの時間が本当に大変なので、育児を手伝う存在は本当に助かると思う」。女性の夫（35）も「市長のようなリーダーが風土を作っていくのは良い取り組みだと思う」と話した。

---

毎日新聞のニュースサイトに掲載の記事・写真・図表など無断転載を禁止します。著作権は毎日新聞社またはその情報提供者に属します。画像データは（株）フォーカスシステムズの電子透かし「acuagraphy」により著作権情報を確認できるようになっています。

Copyright THE MAINICHI NEWSPAPERS. All rights reserved.